
少年陰陽師～永遠に続く誓い～

宵千鬼江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年陰陽師～永遠に続く誓い～

【NNコード】

N2977Z

【作者名】

宵千鬼江

【あらすじ】

晴明と昌浩が現世をさつてから1000年余りが過ぎた。この一人に心を開いていた十二神将騰蛇こと紅蓮は、再び心を閉ざしていった。晴明と昌浩の願いで今だ安倍家に仕えているものの、紅蓮の神氣の強さにおびえる者ばかりだったからだ。そんな紅蓮を、道反の大神と知り合いだつたため、時折現世に降り立ち、術を使うことで許された晴明と昌浩は心配しながら見ていた。しかし一向に紅蓮が心を開かないでの、晴明と昌浩は道反の大神に頼み込み、術を使つて昌浩を現世に戻すことにした。

しかし、安倍晋三は再び現世に生を受けた。

再会（前書き）

初兆戦です。少年陰陽師の一次創作。途中で挫折するかもしませんが、よろしくお願いします。

再会

異界に閉じこもっていた十一神将騰蛇こと紅蓮は、背後に神氣を感じた。

「勾、何の用だ。」

「なんだ、用が無ければ来てはだめなのか?ここは私たちの異界だぞ。」

「用はないのか。」

「昌明に子供が生まれた。見に行つてみる。」

「どうせおびえて泣くに決まっている。」

「行くだけ行つてみる。あいつの靈力が珍しくてな。青龍まで見に行つている。」

「青龍まで?わかつたよ。行けば氣が済むんだな。」

「そうだ。」

仕方なく、紅蓮は人界に顯現した。その部屋ではぐつすり寝ている赤子を取り囲んで十一神将がいた。

紅蓮が顯現したことに気がついた十一神将たちは紅蓮が予想していた通りの反応をした。

太陰は隣にいた百虎の後ろに隠れ、青龍は即座に異界へ戻った。多少態度が軟化したものの、1000年前から十一神将たちの紅蓮に対する接し方は変わらない。それら全ての反応を黙殺した紅蓮の背後にまたもや神氣を感じた。

「勾、帰つていいか?」

「まだ赤子を見てないだろ?見てたらお前はそんなことは言わない。・・・・・ほれ。」

「お、おい?赤子は嫌いだとあれほど・・・・・」

「その靈力、懐かしくないか?」

「・・・・!昌浩の靈力にそっくりだ。」

「そうだ。泣いてもいないだろ?」

< - ! >

心底驚いている紅蓮を見ながら、十一神将たちも同じことを考えて
いた。

そこに、昌明が来た。

< お、昌明、この子の名前はなんと言つんだ? >

< あ、勾陣、十一神将の皆様もおそろいで。 >

紅蓮を恐れている昌明は言葉遣いに気をつけながら、赤子の名前を
言つた。

< 昌浩と。 >

< くくくくくは? > > > > >

< くくくえ? > > > >

異口同音に声を上げる十一神将たちの後ろで、紅蓮は声も上げられ
ぬほど驚いていた。

親ばか（前書き）

少し前置きが長くなってしまった。少年陰陽師、めげずに一作
目です。

親ばか

昌浩の世話をしていた紅蓮は、1000年ほど前に想いを馳せていた。名前も同じ、靈力も同じ、もしかしたらこの子は昌浩の生まれ変わりではないかと十二神将は期待していた。しかし、陰陽術を教えようにも今は平成、術など必要ないからと最近は術を受け継ぐことをせず、見鬼の才だけが受け継がれている状態になつており、十二神将も呪文を知つても使うことはないので術の発動の仕方を教えることはできなかつた。悩む十二神将の中でただ一人、ここにいてくれればそれでいいと、紅蓮だけが昌浩を親のように世話をしていた。

「どうしたんだ昌浩、そんな顔して。」>

「れ～ん、ボ～つとしてた。だいじょうぶ?」>

「ああ、すまない、大丈夫だ。」>

「れ～ん、れ～ん、そといこ。」>

「外? 危なくないか?」>

そこに、勾陳が顕現した。

「私とお前がいれば問題ないだろ?」>

「それでいいのか?」>

「闘将が一人だぞ! ? この時代は害をなす妖怪なんぞそういうない。大丈夫だ。」>

「でも万が一ということも……」>

「大丈夫だ。そういういつてる間に昌浩が出て行くぞ。」>

「何! ?」>

見ると、昌浩が裸足のまま外へ出て行こうとしていた。

「昌浩、勝手に出て行くんじゃない。驚いたじゃないか。」>

「れ～ん、あそぼ。」>

「わかつたよ。」>

昌浩に引かれていく紅蓮を見ながら、勾陳はつぶやいた。
くまつたく、親ばかにもほどがあるな。>

勾陳の独り言にその場に隠行していた十一神将たちは大いに頷いた。

親ばか（後書き）

誤字脱字、あつたら教えて下さい。途中で訂正したりするかもしだせんが、その辺はお願いします。

お年（前書き）

三作目。まだまだげずに頑張ります。

昌浩が生まれてから5年がたっていた。この時代の七五三だ。七五三を終えてお疲れの様子で帰ってきた昌浩は部屋で紅蓮と休憩していた。

「ぐれん、あれなに？あれだよ、あのくらいいの。」

「昌浩、あれが見えるのか？」

それはとても力の弱い妖怪で、相当の見鬼の才がなければ見えないぐらいの雑鬼だった。

「え？ だつてあそこにいるじゃない。いないの？」

「いや、いるにはいるが……」

そこに、十一神将勾陳と六合が顕現した。

「昔の昌浩みたいなことになつてているな。」

「勾か。ああ、しかし今回は見鬼の才を封じる術はないぞ。」

「そうだな、昔なら晴明に頼めたんだがな。」

そこに、ずっと黙つていた寡黙な十一神将、六合が口を挟んできた。

「別に封じる必要がないだろ。今は昔みたいに妖怪が闊歩しているし、万一いたとしても騰蛇がいれば大丈夫だろ。」

「それもそうだな。だが騰蛇なら俺一人では心配だな」とさきをうだ。」

「おい勾、どういうことだそれは。俺一人では心配だらう、どう考えても。」

「お前は十一神将最強なんだから大丈夫だろ、どう考へても。」

「俺は勾陳に賛成だ。」

そこに、ずっと隠行していた玄武が顕現してきた。

「我也勾陳に賛成する。それでも心配なら六合と太陰と一緒にいてもらえばいいと思うが。」

そこに名指しされた太陰が慌てて顕現してきた。

「ちょっと待ちなさいよ玄武、六合はともかくなんで私なのよ。勾

陳が行けばいいじゃない。 >

<風流と風読みに必要だ。 >

<だつたら白虎でもいいじゃない。 >

<太陰の姿かたちは子供だ。 昌浩に近い。 >

<で、でも・・・・・>

紅蓮が恐い太陰は必死にげよつとする。それを見かねた勾陳が折
れた。

<わかつたよ。私がつくよ。 >

結局、昌浩のお供は勾陳と六合に決まった。

お供（後書き）

誤字脱字、気付いたらお知らせください。

小学校（前書き）

少年陰陽師一次創作4作目。まだまだめげずに頑張ります。

小学校

昌浩は今年で6才、今日から小学校に通うこととなる。重いランチセルをもつて、昌浩は白い物の怪と共に家を出た。

「もつくん、行こひ。」>

「おひ。」>

「もつくんさあ。」>

「ん？」>

「学校ではあまり目立つ行動しないでよ。見鬼の才がある人がいたら大変だから。」>

「大丈夫だつて。俺が見えるくらいの見鬼はそういうないから。」>

「でも、勝手な事されると気が散るんだよね。」>

「大丈夫、大人しくしてるつて。」>

「絶対だよ。」>

そして、学校が始まり、最初の授業。

「は～い、ここがわかる人～。」>

「は～い、は～い。」>>>

安倍家でさつさと知識を神将たちに叩き込まれていた昌浩には朝飯前の問題だった。と、そこに物の怪の合いの手が。

「こんなの昌浩にはどーつてことない問題だろ。別に手を上げる必要ねーんじゃねーか？」>

「そんなことないよ。授業なんだからちゃんとやらなきゃ。って言うかもつくん、机の中から出てこないでつてば。」>

「いいじゃねーか。どーせ俺が見える人はいないんだし、お前が小声で話せばばれねーつて。」>

「そういう問題じゃないの。」>

「じゃあどういう問題なんだよ。」>

「俺の気が散るんだよ。呼ばれてるのに気付けなかつたりしたらどうしてくれるんだよ。」>

「そん時はそん時で怒られておけよ。」
「怒られんのは俺なんですけど。」

「知るか。」

「ちょっと安倍君ー わから呼んでるんだけど。何ボウっとして
るの?」

「す、すいません。」

「あなたはボウっとしてることが多かるます。後で私のところへ来
なさい。」

「はー・・・・・。ほら、怒られたじやないか。今回で何回目だよ。」

「初授業だつてのに。」

「俺は知らねーぞ。お前の集中力の問題だ。」

「ちょっともつくん!ー!ーと叫びそうになるのを我慢して、畠浩は物
の怪に半眼を向けたが、当の物の怪はとこつと、前足で器用に首の
周囲をワシャワシャとかき回していた。」

小学校（後書き）

誤字脱字あれば教えて下さい。

卒業式（前書き）

まだがんばれやつです。 5作目。

卒業式

昌浩は今日は待ちに待つた卒業式。今日で「ランドセルを持つて小学校に登校するのは最後。相棒の物の怪のもっくんはもちろん、十二神将六合、勾陳、天一と、昌浩の父親の昌明と母親の露奈がついてきた。

「今まで長かったな。俺は嬉しいぞ。弟子が独り立ちするみたいで。」

「弟子入りした覚えはない！」

「だから例えだよ例え。」

「どんな例えだよ。」

そんなやり取りを見ていた勾陳と六合は物言いたげな顔で見守つていたが、口を挟むことはしなかった。

「キンコーンカーンコーン卒業生の皆さんは至急体育館にお集まりください。キンコーンカーンカーンコーン！」

「だつてよ。行つたほうがいいんじゃないのか？」

「そうだね。でももつくん、式にまでついてくる気？」

「大丈夫だつて。俺が見えている人なんかそうそういなつて。」

「それはそうなんだろうけど。絶対にいないとも限らないし。」

「だつたら勾と六合も同じだる。」

「あの二人は常に隠行してるしもし顕現したとしても服装が変わつてるだけで少し変な人しか見えないつて。・・・多分。」

その後に多分ということを入れたのは、誰がどう見てもあの服装と背とその他諸々は人間に見えないからである。

「まあ、人じやないしな。」

「そりなんだよね。」

そういういつてる間に体育館に着き、式も始まった。式の時々に物の怪が横で騒いでいるのを除けば、式は無事に終わった。1ヶ月後には昌浩も中学生である。

卒業式（後書き）

誤字、脱字、あれば教えて下さい。

覚醒（前書き）

やっと晴れ覚醒です。六作目、少しこなこです。

昌浩は明日から中学生である。昌浩は相棒の物の怪と十二神将勾陳、六合を連れて貴船の本宮を田指していた。それも真夜中に。安倍家では、子供が中学生になるとなぜか真夜中に貴船の祭神にご報告するという儀式があるからです。

「えーと、私は明日より中学生になります。加護をお願いします。」「えーとつて何だよえーとつて。相手はへそを曲げたら厄介な神5指に余裕ではいる神なんだ。」

「騰蛇、それをここで言うのも控えたほうがいいぞ。」「そんなことを言っている昌浩、物の怪、六合、勾陳の話し声をさえぎるよ」、山の反対側から爆発音が聞こえてきました。

「なんだ? なんなの、今の音?」

「わからん、わからんが行つてみよう。」

「う、うん。」

それだけの会話を交わして、昌浩と勾陳と六合と物の怪は山の反対側に急いだ。そこでは、妖力はさして強くないものの、数がとても多い妖がうろうろしていた。その数の多さにさしもの十二神将も絶句した。

「昌浩、お前は下がつていい。」

「う、うん。」

それだけの会話を交わすと、物の怪は瞬く間に長身の青年に変化した。この青年こそ十二神将最強にして最凶の騰蛇。また、許されたものにだけ呼ばせる名前は、

「紅蓮」

紅蓮は目で応じると、妖の所へ駆けていった。勾陳と六合も同様だった。三人の神将は次々に妖をなぎ倒していくが、数の多さにきりがなかつた。どれほどそうしていたか、妖が不意に三鬪将の間をすり抜けて、昌浩に襲い掛かつた。

「 」

しかし、この距離では絶対に追いつかない。三闘将があせる前で、不意に昌浩は瞠目して、倒れかけた。おかしい、妖はまだ手をだしていない。急に昌浩はシャンとたつたと思うと、訝る紅蓮、勾陳、六合の前で、教えてもいらない刀印を結んで、教えてもいらない真言を唱え始めた。

「 オン、アビラウンキヤン、シャラクタン！ ナウマクサンマンダ、バサラダン、カン！」

妖に無数の亀裂が生じた。昌浩は刀印を構えると、一気に叩き落した。

「 降伏！」

妖の体が木つ端微塵に砕けて四散する。それを見た無数の妖達が一目散に逃げて行つた。三人の神将は、息を呑んだ。が、すぐに気を取り直して昌浩に詰め寄つた。

「 どういうことだ、なぜ教えてもいらない陰陽術を使えるんだ。答えろ、昌浩！」

「 いや、そんなこといわれても俺説明苦手なんだって。」

さらに問い合わせようとした三闘将の真上に、絶大な神気が降り立つた。みると、そこには白銀の龍が人身を取つてゐるところだつた。この方こそが、貴船の龍神である。

「 ほおう、ようやく目覚めたか。安倍昌浩。」

「 はい、お久しぶりです。高於の神。」

紅蓮たちは訳のわからないままそこに呆然と立つてゐた。目覚めたとはいつたい、それよりもなぜ高於の神の名を知つてゐる。

「 どういうことだ、俺達の納得のいく説明をしろ。」

「 だからおれ説明苦手なんだって。」

「 ならば私が説明しよう。」

神将たちはまたもや啞然とした。この声は、いや、そんなばかな、だつてあいつは1000年以上も前に・・・だが、そんなことを考えていた神将たちの思考を昌浩の一言が打ち消した。

<じい様。>

神将たちは、その姿を見て絶句した。が、その姿は紛れもなく神将たちの最初の主だった。

<<< 晴明！ ! ! >>>

覚醒（後書き）

誤字脱字、あれば教えて下さい。

俺のため（前書き）

また長くなつてしましました。7作目、開幕です。

俺のため

十一神将たちは唖然としていた。まず何かしら雰囲気が変わったと思われる昌浩、傷だらけで上の空の三闘将たち、そして1000年以上前に死んだはずの彼らの最初の主、晴明。なぜか横にいる貴船の祭神をほつといても不可解なことが多すぎる。

「これはどういうことか説明してくれ、騰蛇、勾陳、六命。」
上の空の紅蓮を引き戻したのは、困惑が少し少ない天空だった。

「わからん、俺達だつて不思議なんだ。」
「それはそうだらうな。だから私が説明すると何度も言つてるだろ。」

「なら早いとこ説明してくれ。頭が爆発しそうだ。」
「はいはい、じゃあ、皆が座れるところ・・・リビングでいいですよね、じい様。」
「ああ、別に構わんぞ。」
「じゃあ行こう。」
「あ、ああ」

訳のわからないまま十一神将たちはリビングに誘われていった。
「え」と、まさしくこの昌浩は昔の昌浩の生まれ変わりだ。

「そうなのか。靈力が同じだからそうじゃないかとは思つてたんだがな。」
「そうだ。だが私は黄泉から魂魄を飛ばしているから実態ではないぞ。だから姿も二十代の頃のものだろ。」
「その姿になる必要あつたんですか？確かに実態で降りることも許されませんでした？」
「そつなんだが、この姿をとるのが夜に出る時の癖になってしまったな。」
「ちょっと待つた。許されたって誰にだ？」
「道反の大神。ほら、俺達道反の大神の知り合いだつただろ。だが

ら時々現世に降りたり、術を使うことまで許してくれたんだ。だからもつくん達のこともずっと見てたんだよ。>

「唖然となっていた十一神将たちはまた一段と増して唖然とした。」

「こらこら、そんなに驚くんじゃない。まあ、今まで姿を見せることだけは禁じられていたしな。」>

「今日は何の日なんだ？」>

「昌浩が覚醒する日だ。私の術で昌浩の記憶を一時的に消していたんだよ。生まれたばかりの赤子が突然お前達のことを言つたりしたら驚くだろ。それが解かれるのが今日だつたんだ。それが解かれた姿も見せていいと言わっていたんだ。」>

「それにしてはいいタイミングで妖があらわれたな。」>

「ああ、あれは高於の神どじうせ昌浩が覚醒するなら面白じほうがいいと話し合つて決めたんだ。」>

「ちょっと待て、そのせいで俺達は傷だらけになつたつてのか？」>

「明らかに半眼になる物の怪に晴明は飄々と言つてのけた。」

「やうだよ、普通に昌浩が教えてもない陰陽術を使つたら驚くだろ。」>

「驚くよ、驚いたからこりつして問い合わせているんだろ。」>

「そうだな。ということは、昌浩は昔の昌浩だし、私はちょくちょく顔を出しに来るから。こちいち驚かんくれよ。」>

「慣れたら大丈夫だ。それより、そもそもどうしてお前達は昌浩を甦らせたんだ？」>

「それは、もつくんが落ち込んでたからだよ。それで心配になつてじい様の術で現世に戻つたんだ。」>

「昌浩は物の怪の白い毛並みをなでた。十一神将は大体事情がわかっていていつも平静を取り戻しつつあつたが、それとは対照に物の怪は絶句してされるがままになつていた。俺のため？」

「ところで、高於の神はどうしてここに？」>

「面白そうだったからだよ。とうの昔に死んだはずの安倍晴明が本宮に来た時には驚いたがな、事情を聞いて面白そうだから安倍晴明

とあの策を練つたんだ。あの妖も私とこれが脅して従えさせたもの
なのだよ。>

<ちょっと、私を入れないでくださいよ。全部あなたがやつたので
はありませんか。私は見ていただけですよ。>

そんな会話を最後に、晴明と高於の神は帰り、覚醒したばかりで疲
労気味の昌浩は床についた。

俺のため（後書き）

誤字脱字、あれば教えてください。

神将会議（前書き）

なんだか最近長くなつてばかりの気がします。すいません。もう少ししたら戦闘も開始しようと思いますが、今だ話がまとまりません。もうしばらく短編？みたいな物になります。あしからず。前書きも長くなつてしましました・・・では、8作目、開幕です。

晴明が帰つて昌浩が床についたのを見届けた十一神将たちは珍しく異界にて会議をしていた。その中にはいつもは必ず物の怪の格好で昌浩のそばにいる騰蛇こと紅蓮もその場にいた。

「昌浩のそばにいなくていいのか？騰蛇。」

「あいつが陰陽術を使えるなら問題はないだろ。」

「それもそうか。それより、今回のことどうするんだ？」

「どうするといわれてもさあ、私まだ事情が飲み込めてないんだけだ。」

紅蓮と勾陳の話をとめたのは甲高い太陰の声だつた。他の神将を見回すと太裳と玄武も同様のようだつた。

「つまりだな、今安倍家の家の一部屋でグーすか寝ている安倍昌浩は昔の安倍昌浩の生まれ変わりで、それは晴明の術をもつてしてなされたことだつたと、そういうわけだ。」

「え、でもじゃあなんで晴明はこの現世に来たの？」

「それは昌浩が覚醒するのが今日だつたから心配なので見に来たといつ所だらうな。」

「おい、ちょっと待て勾、心配だつたら妖を差し向けたりするか？普通。」

「お前、根に持ちすぎだ。ああいう男なんだよ安倍晴明は。」

「ねえ、妖を差し向けられたつてどういうこと？」

「ん？ああ、太陰は知らないんだな。話してもないしな。晴明は高於の神とつるんで私らに妖を差し向けたんだ。覚醒した昌浩を間近で見せて驚かすためにな。」

そういう勾陳の神氣は言葉をつむぐ度に刺刺しさを増していった。それを感じた太陰を始めとする神将たちは後ずさつていった。ただ1人を除いては。

「おい、勾。お前も根に持つてんじゃないか。皆離れて行つてる

ぞ。>

その一言で我を取り戻した勾陳の神氣は徐々に納まつていった。

くすまない。思い出したらつい。>

神将たちは少しづつ勾陳と紅蓮の元に戻つていった。が、太陰だけは戻りそうになかった。玄武と白虎が太陰を慰めていたが、半泣きの太陰は一步も動こうとしなかった。恐くて動けなかつたのかもしれないが。

く晴明はちょくちょく顔を出すとか言つてるが昌明たちは驚かないのか？>

くそらまあ、驚くだろ。見知らぬ者がいきなりすました顔で現れたら驚くだろ。それに、明日霧囲気の変わつた昌浩を見ても驚くだろうよ。>

くそりか。昌浩が説明してくれるのか？>

くしないかもよ。我々が問い合わせても説明は苦手などといつていたからな。>

くそうなると説明するのは俺らか？>

くそつなるな。おい、騰蛇。お前は昌明に説明を頼む。私は露奈に説明するから。>

くはいはいだが昌明は俺のことを恐れてるぞ。>

くなら太陰、お前がやつてくれ。>

くええ！？何で私が？>

くなんとなくだ。>

くはあ！？・・・もう、わかつたわよ。>

落ち込んでた太陰を慰める勾陳の作戦だと気がついたのは太陰以外の十一神将全員だった。

くげ、もう朝だぞ。異界にいたら時間がわからなくなるのが難点だな。晴明たちも起きてるぞ。昌浩はまだのようだが。>

くじやあ、俺は昌浩をたたき起こしてくるとするか。まつたく、今日から中学生だろうが。>

そんなこんなで久方ぶりの神将会議は終わりを迎えた。

神将会議（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

祖父と兄は同一人物（前書き）

今回も長くなってしまった。これからずつと長くなるかも知れません。

そういうわけで、9作目、開幕です。

祖父と兄は同一人物

昌浩は朝つぱらから物の怪に叩き起しだれて機嫌が悪かった。
「まつたぐ、まだ4時だつてーの。出発は7時。」
「そう怒るなつて。昌明が怪しんでるだらうから説明してくれたら
なと思つてな。」
「いやだよ。もつくんが説明してくれたらいいじゃんか。」
「俺は・・・嫌だ。」
「なら俺だつて嫌だよ。」
「そついわづに説明してやつたらどうだ?」
昌浩と物の怪は突然降つてきた声にとても驚いた。
「じい様、脅かさないでくださいよ。つて言つかなんですか朝つぱ
らから。父上になんていつたらいいんですか。父上から見たら見知
らぬ青年ですよ?」
「そつだな。昌明には後で説明してやるとして今日はお前の入学式
なのだろ。私も行こうかと思つてな。」
「ちよつとじい様!? 何考えてるんですか?じい様は靈なんですよ
!?」
「大丈夫だよ。ちゃんと皆にも見えるように術を施すから。」
「そついう問題ではありません!俺の家族にじい様はいないとい
うのが世間の認識なんですよ?じい様が式に現れたらなんと詰め寄ら
れるかわかつたもんじゃありません!」
「それも大丈夫だよ。お前に関わる者全てに術を施して私はお前の
兄ということにしておいたから。」
昌浩は絶句した。兄、兄、兄つて。じい様が兄?何でそうなるの?
「ちよつと待てよ晴明。お前まさかだから魂魄を切り離してきたの
か?」
「それ以外に何がある?」
「・・・・・・・・・・もついい。」

物の怪はそれっきり沈黙してしまった。対する畠浩はまたもや晴明に質問を投げかけている。

「なら、父上と母上にも同じように術を施したんですか？」

「いや、晴明と露奈は本当のことを言つたほうがいいだろ。家族だからいつ気付くかわからん。」

「そうですね。」

「ところで畠浩。」

「はい？」

「お前、昔から父上、母上と呼んでいるのか？」の時代は皆お父さん、お母さんと呼んでいるそうじゃないか。」

「え、この家の中だけでしか父上、母上と呼びません。外では皆と同じようにお父さん、お母さんと呼んでますよ。やうしつけられましたから。」

「ならわしのことも家ではじ一樣、外ではお兄さんと呼び分けることは可能だろ。」

「そのために聞いたんですか？」

「やうだよ。」

「……やうですか。」

畠浩も物の怪と同じように沈黙してしまった。そんな畠浩を面白そうに見つめていた晴明は、やっと立ち直ったと思われる畠浩と物の怪に問いかけた。

「では、私が式に出ることには文句ないな。」

「術を施しているのなら大丈夫でしょう。ねえ、もつくん。」

「ああ、大丈夫だろ。六合や勾などみな説明してくれよ。問い合わせられるのはじめんだぞ。」

「わかった、わかった。」

それから晴明、畠浩、物の怪の三人は家族に事情を説明するべく、

部屋を出て行った。

祖父と兄は同一人物（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えてください。

思いがけない入学祝い（前書き）

やつと10作目突入です。もう少ししたら戦闘も開始しそうと思いま

思いがけない入学祝い

昌浩は今日、中学校に入学する日である。昌浩は朝から、父の昌明、母の露奈に入学祝いの品をもらっていた。

「俺からは鉛筆と、ケシゴムだ。」>

「ありがとうございます。」>

「私からは、体操服袋ですよ。手作りだから少し使いにくいかもしれないけどね。」>

「いいえ、とっても使いやすいです。ありがとうございます。」>

「それじゃあ、出発までまだあるからゆっくりしてなや。」後で一緒に出よう。>

「はい。」>

昌明と露奈は部屋から出て行った。と、そこへ全員に説明を終えた晴明が入ってきた。

「おお、昌浩。昌明と露奈から入学祝い、もらったのか？」>

「はい。」>

「私からは・・・」>

「え！？じい様もくれるんですか？」>

「何だそのとてつもなく珍しいような顔は。」>

「だつてじい様用意なんとしてたんですか？思いつきで兄とこう事にしたとしか思えなかつたんですけど。」>

「失敬な。ちゃんとお前の入学祝い用意ぐらにして置いたよ。」>

「そうなんですか？それはすいません。で、何をくれるのですか？」>

「それは学校に着いたら見せてやる。」>

「？」>

「学校に着いたらわかるよ。」>

「はあ、でも、思いつきじやあなかつたんですか？」>

「いや、思いつきだよ。」>

「・・・・」>

「・・・・」>

そこで、青龍が怒号して、この声が届いてきた。

「何? 何なんだ今の。」>

「あの様子だとおもうから太袴だろ? あいつはいつも青龍を怒りしているな。」>

「今度は何をいったんだろ。」>

そこに、青龍の怒声を聞いて逃げてきた太陰が玄武と共に部屋に入ってきた。

「晴明! 青龍を何とかして。あれじゃあ恐くて近寄れないじゃな。」>

「あれは治まるのを待つべきだと私は思うのだが……」>
「それじゃあいつになるかわからぬ? いじやない。嫌よあれをずっと聞いてるなんて。」>

「やうだな、もつすぐ出かけなきやいけないし治めるとするか。」>
そして皆で青龍の所に向かった。

「口う囁。余り荒れるんじやない。」>

「晴明。何でここにいる。」>

「ちよつといじい様? 皆で説明したんじやなかつたんですか?」>

「いや、宵藍だけは異界にいたからな、説明するにもできなかつた。」>

「ならやつやと説明しとけよ。」>

物の怪の姿を見た青龍はすぐに異界に戻ってしまった。

「あ・・・・・」>

絶句して、昌浩達の所に外出準備を済ました晴明と露奈がやつてきた。

「昌浩。そひそひ行くぞ」>
「あ、はい。」>

そして皆して学校に行きました。

「そりいえば、晴明の入学祝いって何なんだ?」>

「やうだ。何なんですか?」>

「すぐにわかるよ。あ、ほら来た。」>

「暁浩！？」

この声を聞いた暁浩は絶句してしまった。

「あ、彰子ー？」

思いがけない入学祝い（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

影子（前書き）

今回も長いです。あしからず。では、11作目、開幕です。

京都にある内裏小学校。この小学校の体育館の裏で、安倍昌浩、安倍晴明、十一神将騰蛇こと紅蓮の変化した物の怪、同じく十一神将の勾陳、またもや同じく六合が彰子を取り囮んで討論していた。

「どういうことですか？」

「他に何があるんだ。お前が一番喜ぶのは彰子姫との再会だろう。そのために私が道反大神に頼み込んで昌浩を現世に戻したその日に彰子姫も戻させていたんだぞ。難易度が高いこの術を立て続けに一回も使つたらどれだけ疲れるか分からぬ訳ではないだろうに、それを逆に問い合わせるような真似をすることは。ああ、日ひるの私の教育が悪かったのか。じい様は悲しいぞ。」

「うつ。入学祝についてはありがとうございます。しかし、どうして彰子なんですか？」

「だからお前が一番喜ぶのは彰子姫との再会だうと思つたからだと何度も言つているだろ。そんな対先ほどのことまで忘れるようになつたのか。うつ。」

「つ・・・・・・・・・。」

わざとらしく泣きまねをする晴明を反論できない昌浩は胡乱げに見据え、額に青筋を立てていた。

そんな様子を見ていた彰子は、くすくすと静かに笑つた。

「ほれ、彰子様にも笑われておるぞ。」

「うつ。」

晴明が言葉を紡ぐ度、昌浩の額に青筋が一本ずつ刻まれていく。それを見た物の怪が晴明に視線を投じる。そろそろやめておけ、昌浩の堪忍袋の緒が切れるぞ。その意味を正確に読み取つた晴明は討論を打ち切つた。

「と、いうことで彰子姫が私からの入学祝だ。彰子様との再会を楽しんで来い。私は内裏を立て替えたといつこの学校を見てまわると

するか。>

そういうと晴明は六合、勾陳を連れて体育館の外にでていった。昌浩と彰子を一人きりにするためだと察した物の怪も尾を一振りして、てくてくと晴明の後を追つていった。

<久しぶり。昌浩。>

<う、うん。久しぶり。・・・彰子は、黄泉でじい様と会つたの？>

ああ、せつかくの再会なのになんて質問をするんだ俺は。その思いがとつても分かりやすく表情に出ている昌浩を見て、彰子は笑いながら答えてくれた。

<ううん、気付いたら現世の私の家の子孫だという藤原家に転生していいたの。>

<え、記憶もそのままで？>

<うん。あの時は驚いた。だつて私の体が赤ん坊で声を出そうとしても泣き声しか出ないんだもの。>

不思議で不思議で仕方なかつた時に、晴明様が私の前に現れたの。>

彰子様、勝手に転生させてしまつて申し訳ありません、しかし、昌浩の相談相手として、現世でもう一度人生を送つてはいただけませんか？もちろん、嫌なら黄泉に戻します。

その言葉で、彰子は大体の事情を飲み込んだ。自分は晴明の術で現世に戻つてきたのだということ、同じく昌浩も現世に戻つているという事、それらを理解した彰子は、こつくりと頷いた。

ありがとうござります。では、時が来るまで昌浩に話しかけないでいただきたい。あれは今は昔のことを覚えていませんので。あれが記憶を取り戻したらまた、お知らせに参ります。

彰子が頷くと共に、晴明は姿を消した。

それを語つた彰子に、昌浩は感嘆していた。そんな一瞬で全ての事情を飲み込んでしまうとは。

<それじゃあ、昨日じい様が来たの？>

<うん、もう朝方だつたから今日といったほうが正しいんだけどね、

昌浩は記憶が戻ったから入学式で昌浩に話しかけてくれって頼まれたのよ。 >

くそなん。ごめん、俺のために彰子を現世に戻しちやつて。>

ハハハん この時代も樂しこう

も予鈴のチャイムが鳴るのを忘れるべからず。

くおい、豊満、乾子。もう式が始まるぞ。
入学式早々遅刻扱いにな
る。今度はアーヴィングだ。

くえ、本当だ、やっぱ、懶じりぐ、彰子。

۷۰

昌浩と彰子はそのまま、走ってきて息が上がっている物の怪をつかんで裏口からこっそり入つていった。

彰子（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

先生達（前書き）

やつと戦闘編開始になるかもしません。そうでないかもしませんが。では、12作目、開幕です。

今日は昌浩、ついでに言つと彰子の入学式で、ある。昌浩は物の怪のもつくん、勾陳、六合と共に体育館の一番後ろに彰子と並んで座つていた。体育館は生徒のお喋り声でいっぱいだった。それは、入学式の司会や祝辞などを全て務める校長先生が一向に来ないからである。

「校長先生、遅いね。」>

「そうね・・・・何かあったのかしら。」>

「それだったら他の先生が代わりに来てもいいと思つんだけどな。」>

「そうよね。そういうえば、他の先生の数も少ないわ。」>

「あ、本当だ。あの数はおかしいもんね。」>

余談だが、この学校は一学年に3クラスしかない。が、最低でも9人はいなければならない先生が、5人しかいないので、昌浩たちは少ないと言つたのだった。

「ねえ、退屈だわ。他の生徒も退屈そう。寝てる人までいるもの。」>

「そうだね。いくらなんでも遅いねえ。」>

「ええ。」>

そこに物の怪が口を挟んだ。

「なら俺が華麗な技を見せてやるよ。」>

「本当? ありがとうもつくん。嬉しいわ。」>

「そうだね。・・・・つて、ちょっと待てもつくん。もつくんが見える人がいたらどうするんだ。ていうか、もつくんの技つてまた足技じゃないだろうね。」>

「他に何があるんだ。さて、標的は・・・・わ?」>

ここで昌浩が物の怪の尻尾をつかんで昌浩のところに引きずり寄せた。

「足技なんかやらないでよ。もつくんが見えない人にそんなことや

つたらどうなるかわかつたもんじやない。>

<えーいいだる。俺だつて暇なんだ。>

<だめなものはだめ。>

昌浩はむくれる物の怪を横田に見ながら、少なからずも集まっている5人の先生に田をやつた。すると、驚いたことに先生達の周りには、目に見えるほどの妖気が漂つていた。さつと青ざめた昌浩を見て、物の怪は怪訝そうな顔をした。

<どうしたんだ、昌浩？>

言葉に表すことのできない昌浩は、先生達の方を指差した。その指のさす方向を見て、わしもの物の怪も言葉を失つた。

<なんだ、あれは。>

<分からぬ。さつき見たときには何も無かつたのに。俺、見るまで全然氣付かなかつた。>

<待て、それは俺も同じだ。どうやら結界を張つていいようだな。>

<う、うん。どうなつてるんだろつ。>

<妖気が漂つてゐるということは妖の変化した姿か、またはあの人間が妖を食つたか。>

<でも、さつきまではなんともなかつたんだよ。もつくんが言つたのはどつちも妖気を漂わせるじやないか。>

<抑えていて、結界まであれば別だ。>

<でも、じゃあなんで急に抑えなくなつたんだろつ。>

<さあな。だが、あれらが妖気を漂わせているなら他のやつひさじうなつてこる。>

物の怪の言葉に昌浩はさつと青ざめた。彰子に「ここにいるよつて書いて、一応勾陳に彰子についていてもらひたるよつて頼んでおき、物の怪と共にこいつそり体育館を出て行つた。

先生達（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

役に立ちたい（前書き）

今回は全然冒頭が出てきませんが、すみません。13作目、開幕です。

役に立ちたい

昌浩と物の怪が体育館を出ると、体育館の裏の塀に座っていた晴明が昌浩に気付いて降りてきた。昌浩の何やら血相を変えた様子を見て、晴明は訝んだ。

「どうしたんだ、昌浩。そんなに血相を変えて。」

「じい様。どうしてここに? 体育館の中にいたんじゃないんですか?」

「いや。全然始まらないから裏でこの時代の都眺めていたんだ。あ、今は都ではなく京都だつたな。」

「はい。・・・つてそんなことよりじい様。先生達からとてつもないほどの妖気が漂っているんです。」

「なに? それは本当か。」

晴明は足元の物の怪を見た。

「ああ、その上そいつらの周りに結界が張つてあつた。昌浩やお前が気付かなくともおかしくないぐらい強固な結界だ。」

「そうなのか。して、昌浩はどこへいくの?」

「他の先生や校長先生達は大丈夫かどうか心配になつて。だから、ちょっと行つてきます。」

「そうか。気をつけてな。私はその妖気が漂つている先生達を見にいこう。何か分かれば他の神将の誰かに伝えに行かせるとしよう。」

「はい、お願ひします。」

「そうい終わるか終わらないかのうち昌浩は駆け出していた。やがて昌浩の背中が見えなくなると、晴明はひつそり体育館の中に入つていった。

「始めに晴明に気付いたのは勾陳だつた。」

「晴明。」

「妖気を漂わせているものがいると聞いたのだが。」

「あれだ。だが結界に囲まれているため、ここまで届いてはいけない。」

「……だが、その近くの者達には少しづつ影響がで始めるようだ。」

「なに？」

言われてみると確かに先生達に近い生徒達は本当に少しづつだが顔色が悪くなつていつている。

「本当に。どうする、晴明よ。」

「そうさな、まずはあの結界を何とかしなければならんな。」

「だがあんなに膨大な量の妖気をまともに食らつて生きていられる人間がこの場にいるとも思えん。」

「そこが問題なんだよな。わて、どうしたものが。」

「晴明様。」

そこで、ずっと沈黙していた彰子が口を挟んだ。

「どうされました、彰子様。」

「あの、……いえ、やつぱりいいです。」

「そんなことおっしゃらずに教えて下さー。どうかされたのですか？」

彰子はしばらく黙つていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「放送で入学式は今日ではなく明日にすると言葉様にお伝えしてはいかがでしょうか。」

晴明は目を見開いたが、すぐに笑みを浮かべて言った。

「それはいい考えです。よい提案をありがとうございます、彰子様。」

「いえ、お役に立てて嬉しいです。」

「だが晴明、どうこう理由で明日にする」とにするんだ。納得がいかなければまことになるわ。」

「そうだな・・・よし、今日は先生方が皆休みだからだとしよう。
納得してくれなければ私がなんとかするよ。」

「そうか。では誰が放送するんだ。私達は当然無理だし、昌明達にはばれないようにすべきだらう。」

「そうだな。では私が・・・」

「私がやります。」

晴明の言葉を押しのけて彰子がいった。

「私にやらせてください。昌浩達の役に立ちたいんです。」

晴明たちは驚いたが、晴明は皆が出て行つた後すぐに結界を破る役目があるので、仕方なく彰子にやらせることにした。

「ありがとうございます。」

目を輝かしてそういうと、彰子は昌浩と同様にこいつを体操館から出て行つた。

役に立ちたい（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。
誤字脱字、あれば教えて下さい。

時が経つても・・・（前書き）

「めんなさい。大分間が開いてしまいました。旅行に行つてたので。と、これはいい訳ですね。すみません。では、14作目、開幕です。

時が経つても・・・

校長室に入る直前で、しかし昌浩はその手を止める羽目になつた。彰子が昌浩の名を呼んでこちらへ駆けてくる様子が見えたからだ。彰子の姿を見た昌浩は、一瞬凍りついた。だが直ぐに我に返つて叫んだ。

「あ・・・彰子!? 何でここに? 体育館から出るなとこつておいただるつー?」

「じ、じめんなさい。でも、放送室・・・」

「放送室?」

少々語氣荒げている昌浩の叱責にうなだれながら、彰子は頷いた。
「うん。晴明様の作戦でね、入学式は明日に延長させて生徒達を外に出してから先生方の結界を解こうということになつて、私が放送でそれを伝えようということになつたのよ・・・」

昌浩はそれっきり沈黙してしまつた。が、昌浩は晴明に言いたい百萬語の文句を胸の中で吐き出していた。

ちょっと待つて下さいよじい様。その作戦が悪いとは言いませんよ、言いませんけど彰子を使うのは少し、いや大分まずいと思うんですけど。っていうか、彰子はただ見鬼の才があるだけなんですよ! ? 彰子にもしもの事が会つたらどうするんですか。

そんな昌浩の思考が手に取るよつに分かる彰子は、困つた顔をして昌浩に説明した。

「あのね、昌浩。この作戦は私が言い出したことなの。だから私がその役目をしたいの。」

「いや、でも。」

それでもまだ渋る昌浩に彰子は懇願した。

「お願い。一緒に行かせて。」

「だめだ。彰子は見鬼の才があるだけなんだぞ。それくらい分かっ

てるだらつ！？>

• \cup \vee \wedge \neg \rightarrow \leftrightarrow

彰子は押し黙ってしまった。目を必死に見開いて、目頭が熱くなるのを必死で抑えている。そんな彰子の様子に、昌浩までも押し黙る。それを見ていた物の怪は思った。

そういえば、1000年余り前にも同じような光景があつたな。あの時は彰子が従姉妹姫を助けるためにお供もつけず一人で夜を出回つていたのだ。それに遭遇した昌浩が、同じように彰子を叱責していたのだった。まったく、こいつらは1000年たつても変わらぬいんだな。

だが、物の怪からするとそこがまた、昌浩の好ましさなのだ。我知道らす笑みがこぼれ出でている物の怪の横で、昌浩が彰子に謝つていた。
「ごめん、言い過ぎた。」

ごくんど 章子は詫いたが 言葉は発しながら 唇をきか
噛んでいた。そうしないと、涙がこぼれ出そうだったからだ。

今度は彰子はふるふると首を振つた。

「設立したーのー！」

またもや声を荒げた昌浩に今度は彰子は反論した。
押し黙つた昌浩に、彰子はうつむきながら続けた。

く前は助けてもらつてばかりで、何にもできないばかりか、足手などいこなつて。だかひ、今世では、役こ立ちたひの。>

涙目で訴えてくる彰子に、昌浩は渋々といった体で頷いた。実は昌

くわかつた。でも、余り無茶はしないでくれよ。へ

くそへー・・・・形子。

何？< >

く覚えとして。前世でも今世でも彰子は足手まといなんかじゃない。

いつも俺の支えになつてくれていた。だから、そんなことは言わないで。

>

昌浩の気迫に少々押され、彰子は頷いた。その後、彰子は頬を赤らめて言った。

<ありがとう、昌浩。>

<へ？>

何を感謝されているのか分かつていなかつた。物の怪が嘆息混じりに叫んだ。

<本当に鈍いな、晴明の孫。>

<孫言うな。物の怪のもつくん。>

<物の怪言うな。>

1000年たつても変わらない昌浩と物の怪の舌戦をみて、彰子は笑みを浮かべた。

どれほど時間が経つても、一人と一匹は決して切れる事の無いであらう縊で繋がっているのである。

時が経つても・・・（後書き）

なんだか昌浩の口調が大人っぽくなってしまった気がします。すみません。

読んでいただき、誠にありがとうございました。

誤字脱字、あれば教えて下さい。早急に訂正します。

言及（前書き）

すいません、更新が遅れてしまいました。その上今回も遅くなってしましました。では、15作目、開幕です。

昌浩は戸を開けた瞬間に、とてつもないほど寒気に襲われた。とつさに彰子をかばう様に前に立つた。昌浩の様子を訝んだ物の怪も瞬時に戦闘態勢に入る。しかし、彰子は気付いていない。

「昌浩、どうしたの？」

「彰子、下がつてろ。」

「え？ う、うん。」

昌浩の様子に、彰子も訝んで、数歩後ろに下がる。

「彰子や俺が気付いていないことは、昌浩の予知だな。」

「うん、そうみたいだね。」

冷静に判断する物の怪に返しながら、昌浩は放送室に視線を流す。運がいいことに、扉は半分開いていた。それを確認した昌浩は彰子にこつそりといつた。

「彰子、放送室まで走つて、そのまま戸を閉めて中についてくれ。放送もできるだろ。」

「うん、分かつた。」

そう返して、彰子は走り出した。と同時に、昌浩達を取り囲む空気が一変した。その原因となつている妖は、まっすぐに彰子に向かっていた。が、髪一筋の差で、彰子が扉を閉めた。ほつとしたのもつかの間、今度は昌浩めがけてむかってきた。

「うそあ！？」

急すぎて対処できていない昌浩の前で炎の闘気が爆発した。昌浩の前に青年が現れる。その一瞬後、炎の壁で妖が跳ね飛ばされ、炎で妖が縛り付けられる。妖が縛り付けられて動けなくなつたため、速すぎて見えなかつた妖の輪郭がはつきりしてきた。その姿は、猿のよつな体に羽が生えており、その妖氣はすさまじい。

「お前は誰だ。」

「我が名は彪鬼。貴様達への借りを返しに来た。」

「借り? 何のことだ。」>

「ほう、忘れたか。しかし、我らは貴様のことをひと時も忘れない。」>

>

「我ら? 他にも仲間がいるのか。」>

「仲間ではない。我が主を仲間などと呼べるか。」>

>

「なんと、主のことも忘れたか憎き術士よ。」>

「お前のことも知らないのに、お前の主なんか知るわけが無いだろう。お前達はいつたい何なんだ。」>

「我らはこれからお前達に復讐する。」>

「復讐?」>

「貴様らにつけられた傷の痛みで我が主は弱つておられる。他の同胞も然り。同胞の傷は主よりは浅い。主よりも同胞が先に回復するだろう。」>

「なぜそこまで教えるんだ?」>

「教えたとしてももうあがくともできないからよ。我は主より一言伝を授かったのだ。」>

「何だ。」>

「貴様につけられたこの傷の痛み、貴様に返してやる。覚悟しておけ。」>

それを言うなり、妖の体は燃え始めた。昌浩達が驚いているのを見目に、妖は熱さで暴れまわっている。

「どうしたんだ?」>

「我的体はもうすぐ消える。我が同胞が回復するまで、今しばらく平和を楽しむがいい。平和の先には、絶望が待つている。」>

「待て、お前の主の名を答える。」>

「我が主の名は――――――」>

その声に運悪く彰子の放送の声が重なり、昌浩には聞こえなかつた。もう一度聞こづと思つたときに、妖は燃え尽きた。

「へへへ、」>

「昌浩、どうしたの？ 妖は倒したのね。」

「あ、う、うん。」

「倒したというか、何というか。」

「じゃあ、じい様のところへ戻ろう。じい様の手伝いをしないこと。」

「うん。」

「もっくん、行こう。」

「おう。」

二人と一緒に体育館へ駆けていった。

言伝（後書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。
誤字脱字、あれば教えて下さい。早急に編集いたします。

結界破り（前書き）

今回も更新が遅くなつてすいません。

16作目、開幕です。

結界破り

昌浩は彰子と物の怪を連れて、こつそり体育館に入っていた。そこでは晴明が、がらんとした体育館の中で昌浩を待っていた。

くじい様。今の状況は？>

く生徒達は皆学校の外へ出て行つた。勘が良いものは出て行くのを渋つていたが、私が出させた。>

く・・・・・無理やりですか？>

くそりだよ。>

く後でどうなつても知りませんよ？>

く何とかするから大丈夫だ。それより、先生たちの事なんだが、妖気が強すぎるため、もし外に漏れ出したら、あれは学校内では納まらん。>

くえ、まずいじゃないですか。あれを他の人が受けたら無事ではすみませんよ？>

くそりだ。だから、結界はお前に任す。>

くはい？>

くなんだ、わからんのか。>

くは、はい。>

晴明は、わざとらしく盛大にため息をつき、目元をねぐら振りをした。

くはあ。そんな事も察しが付かんとは。今までわしが教えてきた事は無駄だつたのか。ああ、じい様は情けないぞ。>

く・・・・・・・。>

ほう。情けないと来たか。この化け狸。ふつふつと湧き上がつてくる怒りをなだめている昌浩の額には、青筋が一本ずつ刻まれている。が、晴明はやめない。

くだいたい、もしこの場にお前しかいなかつたらお前一人でやらなくてはいけないというのに、わしに頼るようでは私は安心して黄泉

に戻れないではないか。>

<そーですか？>

思いつきり胡乱げに聞き返す昌浩に、晴明は面白そうに答える。

<そうだよ。なのに。ああ、なのに。助けるための策を察しする」ともできないとは。情けない。情けないぞ、昌浩や。といつ事で、要修行。>

<・・・・・・・・・・・・>

彰子がいる前で暴れるわけにもいかない昌浩は、限界点直前の怒りを全力で鎮めている。

<じゃあ、どうしろと？>

<だからだな、他の人々に危害を与えないためには、結界を解くと同時に妖気を浄化する必要がある。浄化は私がするから、お前は合図したら結界を破れ。>

<はい。でも、あの結界強力じゃありませんか？>

<確かに、少し強力じゃが、お前と、紅蓮と、勾陳が同時に攻撃すれば破れるだろ。>

<わかった。>

勾陳が即座に諒解するが、彰子の前で本性に戻つた事の無い物の怪は、少し渋つている。

<いや。だが・・・・・・>

そのまま彰子をちらりと見る。視線を向けられた彰子は首を傾げながら、理解した晴明が彰子に話しかける。

<彰子様。この者達が全力を出せば衝撃が強くなります。体育館の外に、避難してはいただけませんか？>

<あ、はい。わかりました。>

物の怪に少々疑問を感じながらも、彰子は体育館を後にした。

<これでいいか。紅蓮。>

<ああ。>

そういうと瞬き一つで本性に戻つた。

<では、行くぞ。一、二の、三。>

晴明の合図と共に、勾陳の神気が一気に結界に向かい、紅蓮が召喚した白炎の龍と共に結界にひびを作った。そのひびの真ん中に、昌浩の術が命中し、結界が鈍い音を立てて破られた。一瞬妖気が暴れだしたもの、晴明の浄化で事なきを得た。

〈ふう。何とかなつたな。〉

〈はい。じい様、俺彰子の所へ行つてきます。〉

〈ああ。後で家にも顔を出すよ。〉

〈はい。〉

昌浩は、物の怪に転じた紅蓮と共に、彰子の下へ駆けていった。

結界破り（後書き）

読んで頂き誠にありがとうございます。
誤字脱字、あれば教えて下さい。早急に編集いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2977z/>

少年陰陽師～永遠に続く誓い～

2012年1月14日16時47分発行